

愛知用水年表

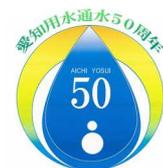


出会った頃の浜島辰雄(左)と久野庄太郎(右)(昭和23年頃)

この年表は、愛知用水建設に多大な功績を残された久野庄太郎氏と浜島辰雄氏を中心に構成してあります。

独立行政法人 水資源機構 愛知用水総合管理所

<http://www.water.go.jp/chubu/aityosui/>



愛知用水は 知多農民の悲願

【用水の胎動】

木曾川の水を知多半島および尾張東部における水の不足地帯に導き、かんがい用水として利用しようとする夢のような構想は、愛知用水事業が計画される以前、すでに早くからあった。

木曾川の利水は、慶長年間に「御困堤：尾張徳川藩を守るため木曾川左岸の愛知県側堤防を高くした。」が完成して以来著しく進み、かんがい用水としてこの川から直接導水する宮田・木津(こつつ)および新木津などの用水が建設された。また、上水道の水源としての木曾川の利用は明治年間にはじまっている。



田んぼと同じ数と言われた皿池の群れ(内海)

日本のまん中、伊勢湾に突出した知多半島は、温暖な気候に恵まれ、また名古屋に近くて、交通の便もよく、その上、人々は勤勉で、古くからこの地を愛し農業に励んできた。しかし、夏の雨が少なく降っても雨は馬の背を分けるかのように海に流れてしまっていて、大きな川もなく、毎年のように早魃(かんばつ：長い間雨が降らず田畑が乾くこと)に悩まされてきた。そのため長い間、大小さまざまな溜池(皿池)を谷間、谷間に造って灌漑につとめてきた。その数は、尾張東部から知多半島にかけて1万3千~5千余个があたかも豆をばらまいたように造られてきた。

これは千数百年前、日本の国に稲作が伝わって以来の地域住民の汗と涙と血の結晶であった。その溜池にも年によって秋から春にかけての雨の少ない年には満水にならず、田植え水にも困った。また、無事田植えはできても、夏の雨が少なければ、せっかく植えた稲も青立ち(時期がきても穂が出ない)となり、稔らない。

ところが、知多半島から境川、衣浦湾を隔てた三河で江戸後期に和泉(現・安城市)の都築彌厚(つづきやこう)翁(地域一番の醸造家)が、矢作川から水を引いて、安城ヶ原の小松林を美田に変えようと石川丈山の協力を得て計画を立てたが、志半ばで破産、中断してしまった。明治の世となり、中断から65年、伊与田与八、岡本兵松らによって3年にして用水を完成(明治13年)、小松林を美田とし、その後、日本のデンマークと称されて名声を誇っている。

これを見た富貴村で郡農業会副会長の森田萬右衛門は、多年自村の別曾池改修など、殖産興業につとめてきた経験から、知多半島にも、三河の明治用水のように、木曾川から水を引き、用水を造り、農業を根本的に改良すべきであると機会のあるたびごとに青年男女に話した。氏の多年にわたる溜池・水路の改良などに土地改良事業で実績をあげているから、聞く青年達も、単なる夢物語とは思えず、傾聴した。その青年の中に久野庄太郎がいた。



森田萬右衛門の像 武豊町富貴支所前

【浜島辰雄氏の経歴】昭和21年から大府市に在住

大正5年2月8日 愛知県豊明村（現 豊明市）栄194番戸農家の五男として誕生

大正11年4月1日 豊明尋常小学校入学

大正13年 夏 8歳 東尾張地方干ばつ

父親に水番を任されたが子供であったため、水泥棒に水を取られる。

昭和10年 愛知県安城農林学校農科卒業

昭和14年3月15日 三重高等農林学校農学科卒業

昭和14年4月1日 23歳

南満州鉄道調査部へ入社。満州・内蒙古にて、牧場での畜産増産のための草資源の調査を担当する傍ら、草の生育に不可欠な水を確保する手段としてダム計画を作成し論文とした

昭和20年8月15日終戦 (株)満鉄 自然退社

昭和14年の旱魃

7・8月の雨がなく、東海地方では稲の出穂前の干ばつで青立ち不稔の地域が多かった。

昭和14年～19年

内蒙古での兵役、豊橋の陸軍予備士官学校を経て19年2月名古屋陸軍幼年学校（小牧）の教官を命じられる。本部付（訓育部長副官）現地生活、生物学教官を担当する。

昭和19年 28歳 大干ばつ

この年は、冬から春先にかけて雨が少なく、尾張東部から知多にかけての1万3千個のため池には田植え水も貯水ができなかった。浜島はそのとき小牧にいて近くは木津用水の受益地で田植えは順調に終わっていたが、郷里はまだ田植えが終わっていないことを新聞で見、急ぎ豊明に帰った。途中、春日井への峠近くで婆さんが、“こまざらい”で田に穴を開けて稲の苗を植え、土をかけてはヤカンで水を注いで田植えをしている。水は下の池から爺さんが肥桶で担ぎ上げていた。そんな中、満州・内蒙古でダム計画を作成したことを思い出し、木曾川から導水して水を引く図面を書き始める。

昭和21年9月21日 愛知県田口農林学校教諭に

昭和21年12月1日 安城農林学校教諭に転勤。大府市へ転住。今日に至る

昭和22年 尾張地方の大干ばつ

昭和23年 愛知用水の概要図（1/2.5万）を書き始める。

【久野庄太郎氏の経歴】

明治 33 年 11 月 15 日

知多郡八幡村（現・知多市八幡町）に長男として生まれる。

家は貧しく後に 3 人の弟が生まれ家の手伝い、子守りで小学校へも満足に行けなかった。

明治 43 年 10 歳

愛知県知多郡八幡村立八幡小学校卒業後、家事の農業に専念。農閑期の冬は正月前後百日くらい、知多の伝統芸能尾張漫才に出稼ぎに行った。100日で10円の仕事。8年間も続けた。

大正 6 年 17 歳

知多半島の水不足は深刻だったことから用水構想の芽生えは早く、明治末期には、知多半島の水不足を経験した知多郡富貴村長の森田萬右衛門は農民たちに、碧海郡に明治用水があるように、知多にも木曾川から用水を導き、用水路を作り、農業を根本的に改良すべきである、と機会があるごと、青年達に熱く語っていた。

愛知用水の生みの親、久野庄太郎はその青年の中の1人であった。

大正 15 年春 26 歳

父の弟久野惣太郎の次女、はなと結婚する。

結婚記念に仲間と海苔の種網を買い、前浜で海苔の養殖を始める。また、漁船を購入して雑魚を獲り、売ったり、肥料にした。久野家の農業は多角的で、耕地面積も収穫量も県下一といわれた。

昭和 10 年

家事農業に専念するかたわら、極めて強い向上心から、農学、遺伝学、植物学の良師を求めて、勉学し、進んで農聖山崎延吉先生に師事して興村行脚の供をし自ら研鑽に力めた。一方選ばれて



知多郡農会の農村研究員、米穀改良委員、拓殖研究員として、昭和 11 年頃の久野庄太郎農村問題に取り組み、農業経営の改善、稲作の改良などに努力した。

昭和 10 年 2 月 11 日

父、彦松とともに、親子優良農家として愛知県知事篠原英太郎より表彰を受ける。

昭和 11 年

愛知県知多郡八幡村販売購買組合を設立し、地元特産馬鈴薯、葱類の出荷統制委員会を設立し、その委員長に推され組合員 1,250 名の出荷統制を日夜を分かたない努力によって見事に実施し、東西の市場の不明朗な組織を改め、公的卸売市場設立の礎石をつくり、一方特産地形成にも努力してその後の、愛知園芸農産物の出荷態勢の基礎をつくった。

昭和 11 年

優秀農家として有栖川宮農業功労章を受けた。

昭和 11 年 10 月 11 日

末弟、善次郎が中国で戦死。戦争は絶対反対。戦争を避けるためにはどうすればよいか、考察を繰り返す。弟の戦死の刹那を思い、愛知用水建設の過程においても、戦死の覚悟で邁進することを決意した。



昭和 18 年

精農家として勤労顕功章（農林大臣）を受けた。

昭和 20 年 11 月

愛知県の農業事情御視察のため天皇陛下が御行幸になった節に、愛知県知事推薦により安城農業試験場において御前講演を実施し、妻はな（昭和 16 年頃）声泣下る講演に天皇陛下も深く感激されて、各種御下問になり、天皇陛下も「この上とも、食糧増産をしっかりと頼みます」と御言葉を賜った。以後久野庄太郎は、農業のことは誰に頼まれたでもない天皇陛下に頼まれたと自負し身命を賭して、あらゆる犠牲を顧みずやらねばならぬと心に誓った。

昭和 21 年 5 月 5 日

知多農村同志会を（会員、農村自営者を中心に約 1,000 名）設立、第 1 回会長に推された。以後この会は用水運動の強力な推進母体となった。農村同志会は、農業経営改善、農民協同精神の涵養、農政知識の向上を計ることを目的として設立された。

昭和 14 年・19 年・22 年

中部地区大旱魃、特に知多半島は災害激甚、殆どの水田の稲は立枯、青立となる。久野は自ら先頭に立ち、自分のポンプエンジンを駆使して、昼夜を分かたず僅かの水を汲み上げて、自他の水田の区別なくかんがいし増産につとめた。知多半島は昔から水に乏しく、溜池や、溜り水の汲み上げ（手桶、はねつるべ）は常習であり、久野庄太郎は子供の頃から、水汲みの苦勞（二段替え、三段替え）は身を似って体験しているので、衆人に先んじて、かんがいポンプの設備をしていた。

昭和 22 年 3 月

昭和天皇巡業の折、久野庄太郎は陛下に農業問題をご進講、陛下から激励を受け木曾川疎水の決心をする。

注：二段替え、三段替え：水場横の田が一段、その上の田が二段、、、。一段の田を満杯にし、その一段の水を更に二段の田へ運ぶ。桶を担いで坂を登るので大変な仕事。二段から三段目へ水を運ぶのは「三段替」。



水やり

【二人をとりまく年表】

昭和 23 年 5 月 5 日（ツツジを見る会）

久野は、農聖山崎延吉を安城の自宅に訪問、木曾川からの用水運動を相談。技術的見透しがあるか、その可能性があれば、次は政治問題である。私も余生を傾けて支援してやる」と云われた。

昭和 23 年 5 月 6 日

久野は農林省京都農地事務局訪問後、愛知県農地部長に相談「技術的に可能性は充分ありと回答を得る。

昭和 23 年 5 月 21 ~ 22 日

久野、明日壁二人で現地を調査

今渡発電所高橋所長から、下流の農業用水の許しがなければ、上流からは一滴の水といえども取ることができないと教わる。



昭和 23 年 5 月 ~ 久野・明日壁で用水構想図作成

昭和 23 年 6 月初

昭和 27 年 4 月愛知用水新聞附録

久野は用水運動の指導者として緋田工元特高警察官を迎える。

（彼は戦時中、東海軍管区司令長官 岡田中将の幕僚として知多に来ていた。）

昭和 23 年 6 月 25 日

地元有志による愛知用水実現の運動開始

朝倉（現知多市）の魚屋旭屋の二階で農村同志会の下打合せを行う。集まったのは、木曾川用水発起人久野庄太郎、愛知県耕地課調査係長三好富雄、愛知県農業会知多郡支部事務局長田村金平、同次長赤壁京一、久野庄太郎の私設顧問緋田工の 5 名であった。

昭和 23 年 6 月 25 日

森信蔵半田市長に既成会会長を依頼

この用水運動の事務局長を自任している田村金平は、知多半島のことは半田が中心となって、町村が団結してことをすすめるならわしとなっているので、渡辺鎌太郎知多郡農業会長の了解をとって、久野と帯同して半田市長を訪問し、用水建設運動の会長を引き受けてもらいたいとお願いした。



左：久野庄太郎氏 右：浜島辰雄氏

昭和 23 年 7 月 7 日 中部日本新聞

木曾川水を知多に引水

尾張平野を縦断延々百キロの大運河

干害に悩む「半島の夢」

記事：「干害に苦しむ知多半島に、木曾川の水を引こうと懸案の運河建設問題が郡内有志の間に真剣に取り上げられている。郡農業会田村次長、八幡（やわた）町篤農家久野庄太郎氏、知多地方事務所青木農地課長らが集まって半島の発展には恒久的な干害対策と工業用水の設備が第一だと近く知多開発期成同盟を結成、同志に呼びかけることとなった。

構想は岐阜県の木曾川上流に水源を求め、丹羽、東西春日井、西加茂、愛知郡から鳴海、大府町を経て半島（道程）百キロを貫流させようとするもので、これによって三千歩が浮き上がり約 1 万町歩の水田をうるおし、染色、織布などに影響するところ大きい。」というものだった。

干害に悩む知多半島に木曾川の水を引こうと懸案の大運河

尾張平野を縦断延々百キロの大運河

干害に悩む「半島の夢」

懸案は岐阜縣の木曾川上流に水源を求め丹羽、東西春日井、西加茂、愛知郡から鳴海、大府町を経て半島（道程）百キロを貫流させようとするもので、これによつて三千町歩の水田をうるおし、染色、織布などに影響するところ大きい。

同業結成、同志に呼びかけることとなった。

昭和 23 年 7 月 15 日

久野宅において県会議員・県農地部長・市町村長・知多農村同志会幹部が参集し、愛知用水計画の説明を聴取

昭和 23 年 7 月 18 日

中日本新聞 見だし

発展する知多の夢～ その名も愛知用水～ 文化営農の基盤、この秋からもう運動～

既報 = 永い間の尾南地方民の大きな夢であり悲願であった“木曾川の引水問題”は 13 日知多高農校での半島農民大会満場一致の決議と、さらに 15 日八幡町篤農家久野庄太郎方における宮下縣農地部長、宮崎同農務課長、森山知多地方事務所長、深津玉一郎代議士、同郡選出縣議、篤農家など二十余名の懇談によりこのさい万難を排して一日も早く実現に乗出すことに決定、8 月早々沿線町村はもちろん各方面の有力者や権威者を一丸にその名も“愛知用水”期成同盟会を結成し尾張を中心に全縣的運動に発展させようと積極的な動きを見せている。(カットは愛知用水図)

この用水は、水源を木曾川上流の岐阜縣可兒郡兼山町に取水口を築き文字どおり尾張一国を南北に縦断する一大水路で美濃の南部に発した本流は尾尾北の山村地帯を貫流して知多本島に入り、中央部丘陵の尾根を傳つて南知多から伊勢海に入るもので行程約 40 里、さらに知多郡上野町付近から東南の丘陵に分岐して半田市内で知多湾に注ぐ支流約 5 里を合わせると総延長実に 45 里内外に達する。水路は幅 15 尺、深さ 2 尺で標高は本流取水口で海拔 80 尺、尾北地帯は平均 60 尺、知多半島では同 40 尺を保って流れ年間 15 万立方尺を通水、しかも尾三伊勢路の風光を一望に納められる観光道路とする。・・・略

【 同じことを考えている人がいた 】

昭和 23 年 7 月 21 日

朝日新聞の記事で、農民の運動が紹介される。安城農林学校教師 浜島は、その記事を読み、同じ志を持つ久野の存在を知り衝撃を受ける。早速自転車で 1 時間弱の久野邸まで会いに行く。

【 二人の出会い 】

昭和 23 年 7 月 23 日

浜島：一日目、二日目は忙しい久野に会うことができず、3 日目でやっと会うことができる。

浜島は 19 年干ばつの時、木曾川から水を引けないものかと計画図を作っていることを話す。新しい 1/2.5 地図があればおおよその計画図が書けると話し、久野は亀崎（現半田市）の岡田氏のところでもらってくると答える。

昭和 23 年 7 月 24 日（尾張富士に登る。）

朝の 8 時、二人は名鉄神宮前駅で落ち合い、米と水を持って、旧友宅に泊まりながら、2 泊 3 日の予定で用水路計画地沿線を歩く。犬山市の尾張富士に登り、用水路の路線計画を浜島が説明。二人は固い握手を交わし、必ず故郷を緑の大地に変えようと誓う。

浜島、週末に詳しい現地踏査を開始。同時に毎日 3 時間睡眠で図面作りをはじめ。3 カ月後に完成した計画図は浜島の小さな家の畳 6 畳の部屋がいっぱいになる程の巨大な大きさであった。

昭和 23 年 8 月 7 日 農村同志会・愛知用水建設祈願祭を催す

昭和 23 年 8 月 10 日ころ 愛知用水概要図完成



農民へ説明する浜島氏

昭和 23 年 8 月 18 日ころ

農林省開拓局長との特別会議

豊明中島出身の伊藤開拓局長に久野・浜島ほかで用水計画図を説明。局長は地元がまともだったら、農林省開拓局に陳情に来るようにと約束された。（ p 85 ）

昭和 23 年 9 月～ 10 月

市町村学区説明会実施 浪曲「都築彌厚翁の苦心談」に聴衆が感激している幕間に久野氏が「愛知用水概要図」（縦 4 沓、横 2 沓）を掲げて説明した。話も聴衆を魅了して、人気を博し、各町村とも競って説明会がのべ 70 回開かれた。

昭和 23 年 10 月 1 日

努力が実り知多半島の 1 市 25 町村すべてが参加する愛知用水開発期成会が設立される。



昭和 23 年 12 月 22 ~ 23 日

第一回陳情団（総理官邸前）

知多農村同志会、期成会員で愛知用水事業を国営農業水利事業として農林省に要請

昭和 23 年 12 月 24 日

吉田茂首相に愛知用水の建設を陳情

首相は、「食糧増産、失業救済、いいじゃないか」と前向きな姿勢で話しに聞き入り、5 分の予定が 40 分に延長した。

昭和 24 年 4 月 1 日 浜島は、半田高等学校農業過程へ転勤となる。

昭和 24 年 7 月 25 日 伊藤開拓局長の指示により、農林省の直轄調査が始まる。

昭和 24 年 9 月 15 日

愛知用水開発期成同盟会結成

同盟会長には半田市長森信蔵氏

氏は、戦前新聞記者として 30 年間アメリカに駐在した。

昭和 24 年 9 月

同志会と既成会が中心となり T.V.A の考え方を愛知用水に当てはめて構想をまとめ、「愛知用水の趣旨と理想」と題する論文を完成した。



昭和 25 年 5 月 5 日

森信蔵半田市長、世銀に橋渡し

期成同盟会会長森信蔵は全国市長会代表として渡米の際「愛知用水の趣旨と理想」を翻訳して世銀にガードナーに手渡し〔英文パンフレット Aichi Irrigation System(Its Prospects & Ideal)と同付図。〕、要旨を説明。

昭和 25 年 7 月 12 日 ~ 16 日

高松宮殿下愛知用水地域を視察。根強く反対していた木曾川下流の農民へ、納得のいく説明ができるよう手助けをされた。山崎延吉先生の説明、気のきいた冗談も手伝って、大変爽やかに、双方をまとめる結果となった。

昭和 25 年 12 月 ~

毎年年末にお世話になった家庭に特製の鏡餅を飾って回った。一回につく餅は、なんと米 12、13 俵分。高松宮家、吉田首相邸にもこの鏡餅を携えて毎年御礼に上がった。

昭和 26 年 5 月

愛知県知事桑原幹根氏

愛知県挙げての支援体制となったばかりではなく、その後の豊川用水、矢作用水事業等々用水事業にもご尽力された。



愛知用水への期待を語る桑原知事

昭和 26 年 10 月 10 日

農林省木曾川水系総合農業水利事務所を名古屋に開設、我国初の調査事務所であった。

昭和 26 年 12 月 1 日

愛知用水大規模農業水利改良事業国営施行申請を提出（久野庄太郎ほか 15 名）

昭和 26 年

ダムで水没する王滝村と三岳村が、ダム建設反対同盟を組織し、反対運動を展開。久野氏は村へ何度も足を運び、移転予定の 140 戸全てを回って頭を下げ、理解を求めた。

昭和 27 年 8 月 31 日 愛知用水事業の本格推進のため、浜島氏、教師を退職する。

昭和 27 年 11 月 6 日

世銀ドール、日本経済調査団長として来日、デ・ビルデ・ギルマーチン現地視察日本政府によって世界銀行融資につき最初の折衝

愛知用水実現に努力、
世銀農業調査団が来名談



記者会見する世銀農業調査団の一行（左より桑原愛知
県知事、三人談いでドール元団長、右吉田利文氏）

s29.7.29 新聞

昭和 29 年 7 月 29 日

世銀農業調査団来日、
写真右桑原知事、二人おいてドール団長

昭和 29 年

挨拶回りなどの一切の裏金を個人資産でまかっていた久野氏は、用水運動によって全ての個人資産を費やし、破産宣告を受ける。

昭和 30 年 2 月 19 日 農林省清野技術課長、世銀借款予備交渉のため渡米（帰国 5/7）

昭和 30 年 9 月 30 日 愛知用水事業基本計画の概要告示

工事時期：昭和 30 年～35 年

工 費：321 億円（うち世界銀行借款 700 万ドル含む）



アメリカ人技師

和 30 年 10 月 10 日 愛知用水公団設立。名古屋に本部を設置

昭和 31 年 5 月 4 日 アメリカのコンサルタント E.F.A との技術援助協定を締結

昭和 32 年 6 月 3 日

愛知用水土地改良区理事長ら、事業実施計画の早急告示について農林省などに陳情

昭和 32 年 8 月 9 日

世銀借款契約および政府保証契約調印（ブラック世銀総裁、朝海駐米大使、浜口公団総裁）

昭和 32 年 9 月 10 日 農林大臣は事業実施計画に関する法的手続完了の旨告示

昭和 32 年 11 月 5 日 三好池工事に着手

昭和 32 年 11 月 17 日 長野営林局と王滝森林鉄道の付替について協定を締結

昭和 32 年 11 月 17 日 牧尾ダム工事（仮排水トンネル）に着手。

昭和 32 年 11 月 30 日 岐阜県営松野池（防災ため池）の建設に関し「松野池建設に関する基本協定」を岐阜県（防災用）と公団（かんがい用補助溜池）で締結。

昭和 32 年 12 月 2 日

愛知県知事は公団に対し名古屋南部臨海工業地帯造成に伴い、工業用水 $5\text{m}^3/\text{s}$ の追加を要請

昭和 33 年 1 月 10 日

入鹿用水土地改良区、愛知用水事業加入を決定

昭和 33 年 1 月 20 日 兼見トンネル工事に着手

昭和 33 年 6 月 11 日

牧尾ダム補償協定書・付属協定書・覚書を三岳・王滝両村と締結

昭和 33 年 9 月 6 日 松野池工事（岐阜県委託：瑞浪市）に着手

昭和 33 年 12 月 1 日 長野県知事より牧尾ダム本工事実施許可あり、即日工事を開始

昭和 34 年 2 月 20 日 三好池工事完了

昭和 34 年 9 月 25 日 愛知県は他府県より、派遣職員(92人)の応援を受ける。

昭和 34 年 11 月 1 日 東郷調整池（愛知池）着工

昭和 35 年 2 月 顔戸（岐阜県可児郡御嵩町）頭首工完成

昭和 35 年 2 月 18 日 兼山取水口工事開始

昭和 36 年 5 月 28 日 牧尾ダム工事完了



昭和 36 年 6 月 22 日 吉田首相 完成した愛知用水視察

昭和 36 年 6 月 23 日 愛知用水テスト夢の水 112 km を通って終点の美浜町内福寺に到着

昭和 36 年 6 月 30 日 松野池完成（13 戸水没）

昭和 36 年 9 月 25 日
兼山取水口 物故者慰霊碑 完成記念碑 除幕式

昭和 36 年 9 月 26 日 牧尾ダム完成記念碑除幕式



昭和 36 年 9 月 30 日 愛知用水通水式

昭和 36 年 9 月 30 通水の日

昭和 36 年 10 月 16 日
愛知用水公団 愛知用水管理事業所を設置

昭和 36 年 11 月 30 日
E.F.A.との間に「技術援助協定に基く役務の完了についての協定書」が調印され、5 年有半にわたる契約解除。

昭和 36 年 12 月 17 日 吉田元総理 東郷調整池完工式に来名

昭和 36 年 12 月 愛知用水工業用水道 第一期事業営業開始（上野浄水場給水開始）
（水の生活感年表より）

昭和 37 年 5 月 1 日 水資源開発公団発足

昭和 37 年 6 月 4 日 東郷ダム記念碑除幕式かんがい記念式
（河野農林大臣等出席）



昭和 37 年 8 月 24 日 農林省、公団、県、農民負担金の返還基本方針決定

昭和 37 年 10 月 離島振興法により海底送水管で師崎 - 篠島・日間賀島送水開始
（水の生活感年表より）

（昭和 39 年 10 月 1 日 東海道新幹線開通）

（昭和 39 年 10 月 10 日 東京オリンピック開催）

昭和 40 年 5 月 1 日 佐布里ダム完成

昭和 43 年 10 月
木曾川水系水資源開発基本計画決定
愛知用水公団の水資源開発公団への統合

昭和 51 年 5 月 18 日

知多市佐布里池湖畔に愛知用水神社・愛知用水水利観音を建立
神社 愛知用水神社 愛知用水観音奉賛会、愛知用水土地
改良区が管理
観音 久野庄太郎氏寄進



愛知用水神社同水利観音

昭和 55 年 12 月 16 日

「愛知用水二期事業促進期成同盟会」設立総会（会長 山田紀男）於：産業貿易館西館

昭和 57 年 3 月 27 日

愛知用水二期調査所開設

昭和 36 年に完成し、通水以来 20 年経過した愛知用水は、地域の生活や産業を支え、中部経済の飛躍的な発展に多大の貢献をしてきた。その一方で地域周辺や水路周辺の宅地化が進み、都市用水の更なる需要が急増するとともに施設の老朽化も進んだ。

そのため通水断面の確保と年間を通して断水することなく保守点検の行える幹線水路の二連化や集中管理方式を導入する必要があった。

昭和 59 年 9 月 14 日

長野県西部地震（M6.8）により、牧尾ダム（御岳湖）に大量の土砂が流入した。

昭和 60 年 2 月 28 日 愛知用水建設負担金完納

平成 3 年 4 月 1 日 阿木川ダム管理開始

平成 3 年 7 月 31 日

愛知用水通水 30 周年記念して水源地と関係受益市町村の首長による「愛知用水サミット」が開催され、地域発展の現状と水に感謝しつつ、水源地の現状と愛知用水のこれからについて活発に話し合われた。（於：産業貿易会館）

平成 3 年 8 月 28 日

愛知用水感謝祭（水源地との交流）記念碑建立、水源地への感謝の集い。於：牧尾ダム

平成 3 年 9 月 21 日

愛知用水感謝祭記念式典（於：名古屋国際会議場白鳥センチュリープラザ）

平成 4 年 5 月 26 日 愛知用水土地改良区創立 40 周年記念牧尾ダムで植樹祭

平成 4 年 5 月 26 日 異常渇水により牧尾ダムが枯渇する。

平成 8 年 3 月 牧尾ダム推砂対策事業開始

平成 8 年 12 月 1 日 味噌川ダム管理開始

平成 9 年 4 月 8 日 久野庄太郎氏、急性心不全にて成願



平成 14 年 5 月 25 日

愛知用水土地改良区創立 50 周年記念植樹

長野県王滝村（牧尾ダム上流）でミズナラ植樹（理事・総代他関係者約 400 名）

平成 15 年 10 月

水資源開発公団が独立行政法人水資源機構へ移行



平成 16 年 10 月 22 日

愛知用水二期工事 竣工式

平成 17 年 3 月 小水力発電設備運転開始

小水力発電施設

この施設は、二期事業により東郷調整池（愛知池）に設置され、3月末には水資源機構の施設で初めて「電気事業者による新エネルギー等の利用に関する特別措置法」通称 R P S 法）に基づく新エネルギー等発電設備の認定を受けました。

発電設備は順調に運転しており、日夜管理費の負担軽減と環境保全に貢献。

平成 17 年 3 月

愛知用水二期事業完了（水路系）

愛知用水は、昭和 30 年に建設が開始され、半世紀を経て 1 期、2 期事業が完成。

以降、地域の生活や文化の発展に貢献することとなる。

平成 17 年 5 月 31 日

愛知用水二期事業（水路等施設）完了報告会（於：東郷町民会館）

平成 18 年 10 月 19 日

牧尾ダム推砂対策事業完了報告会（於：王滝村松原[♫]-ツ公園）



平成 19 年 3 月 二期事業建設工事完了（牧尾推砂対策）

平成 23 年 9 月 30 日 愛知用水通水 50 周年

この年表は、昭和 43 年愛知用水公団・愛知県発行「愛知用水史」、平成 14 年愛知用水土地改良区発行「愛知用水土地改良区五十年の歩み」、平成 17 年財団法人不老会発行「愛知用水と不老会 - 用水建設に命をかけた久野庄太郎とその仲間たち」などから作成しました。